

日本の大学は何処へ行くのか

国際日本文化研究センター名誉教授 大阪大学名誉教授 青山学院大学特任教授 **猪木 武徳 氏**

【美濃地】 皆さん、こんばんは。第2回MURCオープンカレッジを開催させていただきます。本日、講師としてお招きしたのは猪木武徳先生です。最初に中谷理事長からご挨拶と講師の紹介をお願いいたします。

【中谷理事長】 猪木先生とは本当に古いおつき合いで、私が昔アメリカのハーバード大学の大学院に留学したときに、猪木さんがMITで博士課程におられたので、そのときからずっとおつき合いさせていただいています。その後、実は阪大に同じ年に就職しました。私は18年間おりましたが、猪木先生は28年間も阪大におられたようです。その後、国際日本文化研究センター長等を歴任されました。

本人を前にしてちょっと言いにくいのですが、猪木さんは昔から古典の渉獵から始まって、すごい読書家でした。「すごい教養のある人がいるな、とてもかなわんな」というふうに私は思っていました。その猪木さんから、今日、久しぶりにじっくりとお話を聞くことができるのは大変嬉しいことだと思っております。

きょうの参考資料になっておりますのは、『大学の反省』という本ですが、非常に参考になりました。ぜひ出席されている皆さんにも一読をお薦めします。

それでは猪木先生、よろしくお願ひします。

講演

はじめに

ご紹介いただきました猪木です。きょうはお招きいただきまして、どうもありがとうございました。先ほど中谷理事長のお話にありましたように、1969年の秋以来の知り合いといえますか、友人です。当時、私は独身でアメリカに行っていましたが、中谷さんはご夫妻で行っていらして、よく自宅に招いてくださいました。やはり一



宿一飯の恩義というのには弱いですね。ですから、きょうも声をかけていただいて、彼に久しぶりにお会いできるということもありましたけれども、京都から喜んで参りました。

きょうは、演題にありますように、日本の大学に関してちょっと立ちどまって考えてみたいというので、「日本の大学は何処へ行くのか」というタイトルとしました。私は、『大学の反省』という本を2009年に書いたのですが、内容に賛同してくださる方もおられれば、「いや、あなたの大学観は古い」と、「もうそういう時代ではないのだ」という批判も十分受けました。ただ、それでも私の考えは基本的に変わっていないので、きょうはそういった批判に対しても、もう少し筋道を立てて私の考えをお話ししたいと思います。

話の前提：大学の3つの社会的機能

まず、「話の前提」です。「大学」というひとつの言葉の中には、リサーチ・ユニバーシティから、リベラルアーツ・カレッジ系統のものから、職業訓練校的なものから、すべてが「大学」というひとつのカテゴリーに含まれており、たとえば日本の場合ですと学校教育法というひとつの同じ法律のもとで管理されています。ですので、いったいどの大学を念頭に置いて話をするのかによって、話

の内容は変わってくると思うのです。日本に大学は700いくつかありますから、それらの大学を十把一からげで同じ論点を取り上げ、同じ論旨で自分の主張をプレゼンテーションするという事は大変難しいことだと思います。ですから絞ってお話することにします。きょうは、日本で言うと国立大学ですとか、それから私立大学の中ではだいたい名前を知られている大学、平たく言うと誰でも知っているような銘柄大学を念頭に置いてお話ししたいと思います。

そもそも、大学はだいたい3つの社会的機能を果たしてきました。そのうち2つは、「教養教育」と「専門職教育」です。ですから、今日のプロフェッショナルスクール、中世でいいますと、神学とか医学とか法律の学校というのは、一応学部課程を終えてから専門的職業人を養成することになります。おそらく皆さんの中にもプロフェッショナルスクールをお出になった方がいらっしゃると思います。

それから、3つ目の社会的機能として「研究活動」が挙げられます。けれども、実は研究活動が大学の中で位置づけられたのは、だいたい19世紀に入ってからなのです。それまでの大学というのは、中世の大学を念頭に置いていただければおわかりのように、先ほど申し上げた神学校 divinity school のほか、法学と医学を修めるところでした。

ところが、18世紀の終わりごろから西ヨーロッパ、特にオランダ、イギリス等をフロントランナーとして、ご存じのように工業化や産業化が非常に盛んになります。そして、産業化に成功をおさめるということは、技術開発、特に経済活動に直結するテクノロジーの開発に秀でた国が経済的にも非常に栄えるということが次第に分かってきました。ドイツのベルリンにあるフンボルト大学は、哲学者のフィヒテが初代の学長となった大学ですが、研究活動と教育が一体で同じものだという理念を掲げた最初の大学なのです。つまり、プロフェッサーがいろいろと実験したりリサーチをやっていることを、学生がそばで見て手伝ったり、見て学んでいって自分自身も

リサーチャーになっていく。要するにOJTですね。ですから、大学における研究活動と教育活動というものは表裏一体だということは、言ってみればドイツ人の発明であり、セールスポイントでもあるのです。

ご存じのようにドイツは産業化の後発国でしたが、19世紀の半ばぐらいになって大学教育の効果が出てきて、ドイツはイギリスを追い抜くぐらいの工業力を持ち始めるわけです。その時期になって、特にオックスブリッジといいますが、オックスフォードとかケンブリッジ等に対してイギリスの産業界からのものすごい圧力があって、サイエンスとテクノロジーないしはエンジニアリングをもっと大学教育の中のメインのカリキュラムに組み込むべきだという強い要望が出てくるわけです。

オックスフォードとケンブリッジは、もともとは神学校から出発していますから、そのオリジンは神学、哲学、形而上学を中心とした、現代の大学で言うとヒューマニティーズ、人文学の伝統にあるのです。そういう大学ですので、エンジニアリングを大学の中に入れるべきか、入れないのかということに関して19世紀後半まで議論が続きました。アメリカでも20世紀の初頭ぐらいまでは、デパートメント・オブ・エンジニアリングを大学の中に入れませんでした。大学で研究ということが問題になったというのは、そういう歴史的経緯があったのです。

ちなみに、今日の数学については「理系」といいますが、理学部の中にあるのが当然だとわれわれは考えます。けれども、もともと数学、特に数学基礎論は人文学の一部として位置づけられていたわけです。パリ大学なんかでもそうでした。その数学が実は物理やサイエンス、エンジニアリングに役に立つということで、数学はヒューマニティーから理系の方に移っていった学問なのです。だから、ケンブリッジ大学はディヴィニティスクールの伝統がありますが、もともと数学に非常に強い大学なのです。

そういう話をしていると横道にそれるのですが、申し上げたかったことは研究と教育というものが表裏一体だということと、中世において評価が一番高いプロフェッ

サーというものは、いい教育者であるかどうかということです。当時は学会も研究論文という形式のものもなく、みんな自分の考えを本にして発表していましたから、一番大事なものは教育者であるという状況でした。そういう伝統の中から、19世紀後半になって研究活動に対して、注目されるようになり、大学の活動の中で非常に重要だというふうにみなされていったのです。その一番大きな原因は産業界からのプレッシャーであったということです。

3つの重要な「大学論」

これに対して20世紀に入ってから、3つの非常に重要な「大学論」、つまり大学とは何かとか、大学の使命は何かということを議論した本が出ました。その3つの本については、私の本の中でところどころ解説していますが、ヘンリー・ニューマン『大学論 The Idea of a University』(1873)と、オルテガ・イ・ガセットというスペインの哲学者の『大学の使命 Misión de la Universidad』(1930)、それからもうひとつがアメリカのロバート・ハッチンスの『The University of Utopia』(1953)という大学論です。なお、ロバート・ハッチンスは29歳でシカゴ大学の学長になった、桁外れの人間です。

この3者に共通するものは何でしょうか。ちょっと乱暴なくくり方かもしれませんが、要するにサイエンスが突出してきた、そして専門家が行き過ぎてきたということに対しての一種の警鐘を鳴らすといえますか、そういう内容が共通項として抽出できるのではないかと思います。私がへたに解説をするよりも、ご関心のある方はごらんになったらいいと思います。

さて、ヘンリー・ニューマンは19世紀にオックスフォード大学を中心に起ったイギリス国教会内の刷新運動である「オックスフォード運動」の主導者としても有名な人物です。また、ニューマンはイングランド国教会の系統に属するキリスト教の教派アングリカンからカトリックに改宗した人で、彼自身はカトリックの坊さんなので

す。にもかかわらず、大学での研究が教会からの干渉を受けることに抵抗し、大学で行う研究活動なりリサーチというものは、国家や教会からの干渉を受けてはならないということを非常に強く主張した人物です。真理を論究するためには、外的・宗教的・政治的な干渉から自由でなければならない、長期的に見れば、そういうところから興味深い創造の産物が生まれてくるのだ、ということを強調しました。

オルテガも、私の本の中でも引用したと思うのですが、似たようなことを言っています。たとえば、医学がもともと患者の病気を治すという「医術」であった時代と比べて、近年の医学が実験室の科学になってしまったことに対してオルテガは批判的でした。要するに、患者を相手にする医術の衰退を非常に批判した人です。

最近、阪大の理学部の植物の教授と学校の帰りに雑談していたときのことですが、植物の先生は路傍にある植物の名前を全部ご存じかと思ったら、全然だめなのです。名前を知らないのです。それでいて、やれ細胞が分子的にどうこうという話はもちろん超お得意の分野なのです。サイエンスはみんなそういうふうになったわけです。われわれの五感なり生活感覚から離れたところにサイエンスは行ってしまったということ、オルテガも主張しています。

ハッチンスはさっき申し上げたように、若くしてシカゴ大学の学長になりました。彼はいろいろな演説をしているのですが、彼が主張した中で一番印象的な言葉というのは、「専門家の野蛮性」というものです。すなわち、総合的、総合的に物事を見るということは非常に低く見られる時代になったけれども、実は専門家の行き過ぎというもの是非常に野蛮なことなのだと、ということをハッチンスは主張しています。

これらの3人の非常に貴重な「大学論」を展開した哲学者、神学者たちが言ったことは、簡単に申し上げると、人間にとって教養とは何かということなのだと思います。事実、「教養」という言葉はオルテガもハッチンスも使っています。

私はそういう本を読んで、どうも最近の大学は何か妙な、ということを考えて本を書いたわけですが、その中で3つの主張をしました。簡単な命題で言うと、ひとつは今申し上げた教養教育の重視です。この場合の「教養」とは何かということは、後でお話します。

高等教育の私的負担を軽減すべし

もうひとつは高等教育の私的負担の軽減です。

日本の大学への進学率をご存じのように5割を超えています。同世代で高校を卒業して、専門学校等は除いて大学、短大へ進学する人は5割を超しているわけです。

1950年代初頭に文部省は、新規学卒入職者の統計を取っています。当時、毎年毎年120万から130万の人が学校を出て労働市場に入ったわけです。そのうちの中卒で就職した人というのはだいたい何割か分かるかと学生に聞いたら、みんなは「2~3割でしょうか」と言うのですが、実は60%以上なのです。今の若い人に言ってもほとんど信じてもらえないのですが、つまり3人に2人は中学校を終えてすぐに働いたのです。そして大企業は各企業の中で学校を持っていて、大きな企業に就職した人たちは、その学校に通って規定の単位を取ったり、あるいは夜学の高校に4年ないしはそれ以上行って高卒の資格を取ったりしていたわけです。

経済的理由で進学できない人たちの中には極めて優秀な人がたくさんいました。そういう人たちが、たとえば中学校卒業後に企業の中の学校を卒業して、生産現場の一番トップないしは、それからさらに昇進して事務所の課長さんクラスのところまで昇進したのです。もちろん完全な平等ではないのですが、学歴だけでは選抜されないといいますが、OJTを通して実力がある人を選抜していくという力が非常に強く働いた時代だったと思うのです。ところが今は、逆に3人に2人は大卒なのです。先ほど申し上げたように全国に700以上も大学はあるわけですから、大卒ということの意味が根本的に変わってしまったわけです。

ところで、高等教育を受けるときの私的負担が重い国



美濃地氏

が世界で3つあるのです。ご存じのようにヨーロッパも中国も授業料なり入学金を少し取っていますが、年に80万とか120~130万のお金ないしはもっと高い金額を取る国が、世界で3つあるのです。それは、アメリカと韓国と日本です。これらの3つの国は高等教育のコストが私的な家計に依存している国です。ただしアメリカには、スカラシップなり、あるいは学生がお金を借りられるスチューデントローンがあります。日本も育英会に当たる組織がありますが、概して日本は高等教育にもすごいお金がかかります。少子化のひとつの大きな理由はやはり教育費ですね。子どもが大学に行くのに教育費が少なくとも500万とか600万かかるのであれば、子供を5人6人持つというのはよほど経済的にゆとりがある家庭しか無理ですね。ですから、高等教育への私的負担を軽減することが必要だというのが私の主張です。

長期的に見ると高等教育への私的負担の重さ、それから公的な教育に対する支出、それがGDPに占める割合が非常に低い国というのが今申し上げた3つの国なのです。こういうことを言うと、文科省はもちろん財務省も、あなたは全然財政事情が分かってないとか、経済学が分かっていないみたいなことを言われるのです。けれども、中谷さんはどう考えられるか分からないけど、私は経済学はちゃんと修めたと思うのです(笑)。

私はヨーロッパの大学、特にドイツとかフランスの大学に中期的に半年とか3ヵ月いたことがあるのですけれど

ども、ヨーロッパの大学は基本的に無料でした。今でもスペインの大学はほとんど学費を取っていないと思います。また、学生には特権があります。私はドイツのフランクフルトから100キロぐらいのところに立地するマールブルクという大学にいたことがあるのですが、そのマールブルクを中心にしてほしい100キロぐらいの鉄道が学生だと無料なのです。それからカフェテリアの食事也非常に安い券を売っていて、それを食べることができます。中にはルンペンみたいな人が、いつの間にか入って食べていることもあります。そういう人も大学の中にうまく抱えて込んでいるとは、その許容度というか社会的な度量の広さは興味深いものがあります。フランスもそうでしたね。フランスもカフェテリアに行くと、この人は大学生じゃないだろうなと思う人が食べていることがありましたね。

だから、大学への進学率を計算するときドイツは難しいと言うのです。学生の資格を取るのだけれども、勉強する気もない、卒業する気もなしで、ただ鉄道の無料券を目的にしている人も大学に来ていますから。本当に学業を終えて卒業するのはいったいどれだけかというのは、国際間で統計を比較することはなかなか難しいと言われます。

教師という職業

それから、この本の中で指摘した第3番目は、教師という職業をもう一度考え直すべきではないかという点です。本日この会場にいらっしゃる皆さんは文系の方が多いと思いますが、文系においては単に古くからある知的遺産を次の世代に伝えるだけでは十分ではありませんよね。そして、新しい世代の人がぶつかっている問題に対して、完全な答えはもちろん与えられるはずがないのですけれども、先生がやたらに忙しいため、正面から向き合うということができていない。また、理系では、さきほど言ったフンボルト形式というかOJTで、先生に言われたら実験をするという形で、先生の指導は非常に重要だと思うのです。

私も過去を振り返ると、阪大に28年おりましたけれども、その点は非常に反省している点なのです。私は大学時代、大変立派な先生にお世話になったのですけれども、みんなが大学院に行くときに、「あ、あの程度だったら俺も大学の先生になれるわ」と言って、大学院を受けた世代ですから。だから、どうもそういう状況が頭の中にしみついていて、大学というのは野放しに何も教えないというのが、むしろ一番いい教育ではないかという考えがあったと思うのです。

私はそれも一面の真理だと思うのです。だと思のですけれども、それにしても現状はひどすぎると思います。今はものすごい文部科学省からの締め付けがあって、シラバスをつくれとか、授業は15回必ずしろとか、1回休むと、「補講はいつしますか」と必ず聞いてくる。それは事務の方が本当に心配してそう言っておられるのではなくて、ちゃんとしないと文科省が何か言うてくることを気にしておられるわけです。日本の国立大学は、もちろんドイツにしてもフランスにしてもそうなのですが、財政的に独立していないという点は実に弱いですね。「恒産無くして恒心無し」という言葉がありますけれども、ある程度自前の経済的な基盤がないと、人間というものは自由に独立心を持って発言できないものです。経済的に従属するということは、精神的従属だという言葉がありますけれども、今の大学の一番の問題はそのジレンマですね。運営費交付金をもらわないとやっていけない。しかし、徐々に減額はされていますけれども、それをちゃんともらうためには文科省の指導通りのことをしなければならない。そのためにたくさんの書類を書かされているのが実態です。私よりも若い世代の大学の先生方に食事に呼ばれて時々行くことがあるのですけれども、もうみんな疲労困憊していますよ。ですから、そういうことに時間を取られ過ぎて、学生たちが突きつける問題に対して正面に向き合えないということは問題ではないかと考えています。

私が言っているのは確かに理想論なのですが、私的負担の問題もそうです。そんなこと言っても今の財政事

情を考えたら、そんなことは空理空論だと言われたらそれでおしまいなのですけれども、私は理想論をある程度持ってないと、流されるままになるということはおっとひどい無理解を生むのではないかなというので、あえてこの3点を指摘したわけです。

大学問題を論ずるときの留意点

大学問題を論ずるときの留意点については、時間の関係で簡単に2~3の点に絞って申し上げます。

ひとつは、アメリカの大学はバチェラー、マスター、ドクターという段階がありますが、マスターはそんなに大きな意味を持たない場合が多いのです。ヨーロッパの大学でも、アメリカ流にバチェラー4年制にして、その後5年、6年でドクターを取るという形にして、大学の評価等もできるだけアメリカに準拠しようという措置、「ボローニャ・プロセス」と呼ばれているプロセスがあります。ヨーロッパの大学の焦りの一番大きな点は、俗な尺度かもしれませんが、端的に言えばノーベル賞受賞者の数ですね。戦前は、ドイツ、フランス、イギリスを合計すると圧倒的にアメリカを圧していたわけですが、戦後特に1950年代ぐらいから、自然科学・科学技術系統のノーベル賞を初めとする賞の栄誉を受ける学者について、アメリカが圧倒的になりました。そういう研究の遅れみたいなものに対する焦りがヨーロッパの大学にあることは確かなのです。アメリカに徹底的に先んじられたといえますか、後塵を拝してしまったわけです。だから、ヨーロッパの大学を立て直さないといけない。そのためには厳しい集中と選択、そして評価のシステムを導入してアメリカと競争できるような体制をつくらなければならない。そして、ドイツもフランスも似たようなことをやりだして、それで学内でストとかいろいろなことが起こりました。フランスの大学も6~7年前でしたか、えらく大きなストがありました。

それと同時にもうひとつの問題は、大学の財政難です。私の大阪大学時代の学生が今、グラスゴー大学で教えていまして、もともと彼はアメリカでアシスタント・プロ

フェッサーをやっていて、そしてグラスゴー大学に職を得て、グラスゴーに移ったのです。その彼が去年の夏に帰ってきて、会いたいというので、私も向こうの大学事情をいろいろと知りたかったし、彼も日本のことをいろいろ聞きたかったので近くの喫茶店で楽しくお茶を飲んだのです。そのときにおもしろかったのは、彼は修士の学生を20人ぐらい持たされているというのですが、その20人のうちの18人が19人が中国人の学生だということです。つまり、大学が外貨獲得産業として、非常に重要な役割を担うようになったのです。それで一種の工場化しているわけです。工場というのはファクトリーシステムですよ。たくさん学生を入れて、ちゃんと指導して修士論文までは書かせて、そしてお土産に修士号を与えて卒業してもらおうということをやっている。このグラスゴー大学の事例は、よくいろいろ聞いてみると、イギリス全体も押しなべてそうだという話なのですが、ヨーロッパの大学でもすでにかなりのところでそういう現象が起こっているようなのです。

実は日本でもそういうことが起こっていますよね。私は今おります青山学院大学で大学院に2つの授業を持っているのですが、そのひとつには7人の学生がいてそのうちの5人が中国人です。中国の学生はものすごく勉強します。そして、日本語は抜群にうまいのです。もっとも、漢字についてはほかの国の学生よりもアドバンテージがあると思うのですけれども。こういう熱心で優れた中国人の学生と競争すると日本人はやはり負けても不思議ではないなという気がします。実はそういうことが今世界的な規模で起こっているのです。

中国の政府はファンドを設けて、国家規模で選抜試験をやって、アメリカの大学院のPh.D. コースに学生たちを送っているのです。ただし、Ph.D. コース自体は定員がありますから、他のアメリカ人学生ないしは他の外国の学生たちのチャンスが少なくなり、排除してしまうという「中国問題」がアメリカの大学でフリクションを起こしています。

もうひとつは、アメリカの高校とか大学における孔子

学院の問題化です。孔子学院では、中国語や中国の文化を教えるだけではなくて、政治的な教育も行っているということで、州によってはかなり問題が起こっていると報道されています。やはり中国はやり出すとすごいですね。あれだけ優れた人がいて、それがあれだけの数でワーツと押し寄せて、そして競争すると、なかなか太刀打ちできないわけです。これにはアメリカ人もちょっと脅威に感じているのではないかと思うわけです。

そして民主主義と市場経済というものは、基本的には短期的競争の世界ですから、どうしても、今勝たないとうまくいかない。つまり、長期的にのほほんと構えて、なかなか解けないような問題を考えてみようかなとか、長期的に人材を育成していこうとか、そういうロングランの視点から目標に向かって進むことがしにくい。残念ながら民主主義も市場経済もそういう欠点を持っているわけです。もちろん、どの制度も完全な制度というものは無いのですが。そして、この民主主義と市場経済が結合したリベラル民主主義の社会というのは、そういう意味で短期的に人を駆り立てるところがあって、それがさっき申し上げたグラスゴー大学の問題にも端的にあらわれているということだと思います。

公、私、智、徳のマトリックス

先ほど「教養がなぜ重要か」と申し上げましたが、それでは、そういうときの「教養」とは何かということです。

私も「これだ」ということを言葉や文章で申し上げることはできないのですけれども、いろいろ考えてみました。たとえば、「あなたは教養があるな」という言い方をわれわれがすることがあります。この場合、だいたい専門外の雑学というか余計なことを知っているということだと思います。私は中谷先生から昔、「猪木さん、教養があるな」と言われたときに、ものすごい抵抗を感じたのです。さっきもおっしゃっていましたが。でも、ここで言う「教養」とは、そういう概念を払拭していただいて、考えたいと思います。

では何なのか、ということを考えるための、「公と智のマトリックス」について説明させてください。

これは、福澤諭吉の「文明論之概略」の中に出てくる文章をマトリックスの形に私がまとめたもので、私のオリジナリティーはないのですけれども。福澤はご存じのように文明を進めていくものとは、生活の快適さとかそういう物質的豊かさだけではなくて、実は精神を高尚にするという側面が重要である、そういう意味のことを彼は「文明論之概略」の中で言っています。だから、彼は決して物質主義者、拝金教徒ではなくて、バランスのとれた人間の生活とか一国の文明にとって何が大事かということに非常によく考えた人だと思うのです。そして、文明を推し進めるためには2つの要素が大事だと言うのです。

ひとつは、マトリックスの縦軸に書きましたインテレ

公、私、智、徳のマトリックス
(福澤諭吉『文明論之概略』巻之三、第六章「智徳の弁」より)

| | 私 | 公 |
|---------------|-----------------------------------|--|
| 智 (インテレクト) | 物の理を究めて 之に應ずるの働 (工夫の小智) | 人事の軽重大小を分別し 軽小を後にして重大を先にし 其時節と場所とを察するの働 (聡明の大智) |
| 徳 (モラル) | (一心の内に属する) 貞実、潔白、謙遜、律儀など | (外物に接して人間の交際上 に見はるゝ所の働) 廉恥、公平、正中、勇強など |

クト(智)とモラル(徳)です。「知徳の便」という章が「文明論之概略」の中にあるのですけれども、福沢は、そのインテレクトとモラルが両方そろって文明というものは進歩していくのだということを言っているのです。そのうち、徳義(モラル)は「心の行儀」で、「一人の心の内に快くして屋漏に愧じざるもの」を指す。智(インテレクト)は、物事を考え、事物を解し、事物を合点する働きであると書いています。

そして、その「智徳」に、福沢は2つの側面があるというのです。私、つまりプライベートの面と、パブリック、公の面があるのです。「公」と「私」に分けると、2×2のマトリックスになるわけですね。その2×2のマトリックスの左上の第2象限からいきますと「私の智」で、「物の理を究めて之に應ずるの働」、すなわち「工夫の小智」です。これは、たとえば物理学が解けるとか、英語の単語を知っていると、ちょっと平たく言うといわゆる受験的智というものでしょうか。

それに対して下の象限に「私徳」があり、これは「一心の内に属する」、「貞実、潔白、謙遜、律儀など」です。これは異性関係がどうだとか、金銭に関して潔癖かとか、そういう自分自身の徳、心の中に属する行儀みたいなものを言っているのです。

また、同じく右の方に移っていただくと、「公智」です。これは何かというと、人事の——人事というのは人間に関する事柄という意味ですが、「人事の軽重大小を分別し、軽小を後にして重大を先にし其時節と場所とを察するの働」です。だから、何が大事で何が大事でないか、そして何を優先して先にやるべきかというようなことの判断力ですね。それを福沢は一番重要なものとして、「聡明の大智」というふうに呼んでいます。

下の方に行っていただくと、今度は「公德」です。これがさっきの「私徳」と違って、自分の心の中の問題だけではなくて、「外物に接して人間の交際上に見はるゝ所の働」、「廉恥、公平、正中、勇強など」です。名誉、すなわちちゃんと恥を知っているか、フェアか、正直か、勇気があるかということですね。これはいわゆる「社会的徳」とい

うものです。たとえば、みんながいる前で、議論が間違った方向へ流れそうになったときに、いや自分はそう思わないということは、「公德」になるわけです。勇気といいますが、フェアであるかとか、そういうことです。

日本人に欠けている「公智」「公德」

そして福沢は、日本人に一番欠けているのは「公智」「公德」だと言うのです。日本人は「私智」には非常に長けているのです。また、「私徳」に関しては、さきほど言いました通り、異性関係がどうだとか、金銭の問題のことですが、これは福沢に言わせれば、こういうのはもう人間に鼻と目があるように当たり前のことだと言うのです。けれども、日本では政治家をシュートダウンするときにしても、人の足を引っ張るときにも、こういう私徳を取り上げてやんや言うのが好きですよ。ですから、私智、私徳はあって公智、公德なしというような意味のことを福沢が言っているのです。

たとえば、受験勉強ができるというのは、もうすでに誰かが知っていることを時間を与えられて解いて、それが的中したかどうかということですね。だから established knowledge をテストされているわけです。これに対して、ノレッジ・イン・ザ・メイキングといいますが、これから新しいコンセプトなり何か新しいものができ上がろうとしているところに、自分のアイデアを加えていくというような知恵が「公の智」です。つまり何が大事で、何を優先すべきか、というような判断力がないとこれはできないことです。

だいたい、日本人は「私」を重要視します。この「文明論之概略」が書かれたのが1875年ですが、それから140年たっても、「私」が重視されるということは基本的にあまり変わっていないような気がするのです。

福沢が挙げている例を2つほど申し上げると、ひとつは、日本人が太閤秀吉を立身出世の典型として非常に崇めるといえることです。西洋人に対して、秀吉が立身出世したという経緯を話しても、それは単に自分の属しているクラスを見捨てて、自分だけ成り上がった成り上がり



猪木氏

者に過ぎないじゃないか、と反応すると福沢は言っています。これは福沢の言ですけども、西洋人が偉いと思う人間というものは、自分が属しているクラスの人間を救うために何かをやった人だということです。だから福沢は、身命を賭けて藩主の苛政を將軍に直訴した義民・佐倉惣五郎が西洋人のリスペクトを受けるだろうということを言っています。

それから、日本人が「私」を重視するという、もうひとつのエピソードは赤穂義士の話です。福沢は「学問のすゝめ」の中の「国の法律の尊きを論ず」というところで、赤穂の義士と言うけれども、あんなのはおかしい、あれは結局、私裁であり、リンチだと言うのです。自分の主君の恨みを晴らしてそれで復讐を遂げるというのは、あれは国法を重んじた例に当たらないというようなことを福沢は言っています。実は私はそれを読んだときに、最初は非常に反発を感じたのです。やはり「忠臣蔵」というのは非常にジーンと来ますよね。そして、福沢は「楠公権助論」という、要するに主のために命を捨てるなんていうのは何も偉いことではないということを言ったために、いろいろ反感を買って、暗殺のリスクまで背負い込むことになったらしいです。いずれにしても福沢は、日本人は概して「私」を非常に重んじ、「公」に関しての意識が総体的に薄いのではないかとことを言っています。そして、私は「教養」というときに、特に「公智」と「公德」の「公」という概念が重要なのではないかと思うわけです。

人文学系は廃止!?

次に、では人文学というものはなぜ必要なのかということについてです。今、国立大学の法人評価委員会の総会というものが開催されていて、これは大学の学長さんとか経済界からも出ておられますけれども、要するに各界の名士が、国立大学をこれからどういうふうな方向に持っていくかということについて議論していただきたい大きな骨組みをつくる、ないしは骨組みを策定する際のアイデア、参考意見を述べ合うというような性格の会議です。けれども、そこで国立大学の人文学と社会科学系の学部というのを将来的に廃止したらどうだろうという、これは私にとってはびっくりするような話が出ているのです。びっくりする、と言うのは、2つの意味でびっくりするのです。

ひとつは、国立大学から人文科学系、社会科学、経済学部等をなくするということが、文部科学省は右手でやっていることと左手でやっていることは違う、ということになるのです。どういう意味かということ、国立大学の学部別の会計、つまり授業料、入学金をどの学部の学生がどれだけ納めているかということに関するものです。これらは学部ごとに計算できます。そして、国立大学において実験施設を買うとか、図書を購入するとか、そういう雑費から備品まで含めた学部別の支出を計算すると、言うまでもなく、どこの大学でも人文社会科学系がものすごい黒字なのです。一方で、赤字なのは医学部、理学部、工学部です。これらの学部ではすごい物を買いますから。人文系、社会科学系と比較して、支出が1桁どころか2桁ぐらい違う世界なのです。

先ほど申し上げた通り、人文系の学部を廃止するという意見が出ているということについては私は若い研究者から聞いて、その資料をもらって読んでみて驚いた理由のひとつというのは、もしも人文系の学部を廃止してしまったら、国立大学はますます赤字になってしまうけれども、どうするんですかということなのです。今、国立大学は私の知る限り、学部ごとの授業料は均一ですね。医学部に入

学しても、経済学部でも授業料は同じです。おそらく多くの私立大学では、入学金も授業料も学部によって別になっていると思うのです。少なくとも国立大学は今後も均一の授業料や入学金を続けて、もしも人文系の学部を廃止するという案が実現してしまったら、ますます財政赤字に苦しむことになります。だから、これはおかしいということなのです。

人文学はなぜ必要か

もうひとつのびっくりした理由というものが、これからお話しする「人文学」の話なのです。人文学はなぜ必要かという問題と、教養とは何か、教養教育はなぜ必要かという問題とは非常に重なる部分があります。どう重なるかという現実の議論は今、避けることにして、まずは「教養」の定義を、福沢、キケロ、オルテガ、アラン等の著書から見ていきたいと思えます。

福沢は、碁が強い、算数ができるということを「碁知恵」、「算勘」と書いていますが、これは大した知恵ではないと福沢は言うのです。これは羽生さんが聞いたら怒ると思うのですが。それはさておき、碁が強いとか算数、計算が早いというよりも、「公智」「私徳」、「公德」の方が大事だと福沢は言っているのです。

キケロは『ホルテンシウス』という書物でこういうふうに言っています。もっとも、この書物は後の神学者や哲学者が引用しているだけで、原典はない作品のようですけれども。いずれにしても、キケロは「紫を染め込もうとする人が、その前にある種の薬剤に羊毛を浸すように、精神も書物 (litterae) と自由学芸によって予め陶冶され、そして知恵を受け入れる手ほどきと準備をされるのが望ましい」と述べています。つまり、鮮やかに染めようとするならば、その前にある種の薬剤に羊毛を浸しておかないとだめだということで、実は教養教育の「教養」というものは、この薬剤みたいな働きをするものだというのがキケロの説明なのです。これは人文学の必要性についての見事な説明だと思えます。

もうひとつがアランというフランスの哲学者の言葉で

す。彼はこういうことを言っているのです。人間の知恵・知識には2種類あるというコンテキストで、このように述べています。われわれは物を知るときに、立方体の箱を想定して、その中に知識の量というものを球体のようなものとして考える。そして知識がふえていくと、その球体がふえますよね。そうするとその球体が入れられている立方体の箱の残りの空間はだんだん減ってきます。つまり、物を知ると、知らない世界が減ってくるというふうに考えるわけです。これはある種の知識、おそらくファクトというような事実を問題にするような場合には、その通りだろう。ところが、実は事実以外に重要な「智」というものがあるのだと。それは何かというと、今の例で言うと、球体が排除した立方体の中の容積ではなく、膨張していく球体の表面積だということです。事実をたくさん知るということは、球体が膨らむということですが、膨らんだ表面というのが実は分からないことであり、分からないことがふえていくので、よく知るとますます知りたくなる、ということです。

ファクト、すなわちある事実を知っているかということと、そのファクトと別の形で物事を想像できるかということは別のことです。そして、教養というものは、いろいろな断片的な知識をたくさん持っているものではなくて、想像する力が教養なのだと思います。

チャールズ・ディケンズはご存じのように、イギリスが世界の工場だった時代に多くの傑作を物にしたイギリスの有名な作家ですけれども、彼が『ハード・タイムズ』という小説を書いており、これはBBCで映画化もされています。この『ハード・タイムズ』という小説はストーリー自身もおもしろい小説なのですけれども、この中でチャールズ・ディケンズは、事実を教えるという教育だけではだめだということを極めて説得的に語っています。もちろんファクトを知らないで空想だけの世界というのは、これは大問題なのですけれども、ファクトだけを知っていても、次へのデベロップメントがないのです。ですから、ただ受動的に知識だけを受け入れるというような教育なり知的な姿勢ではだめだということでありま

す。

つまり、もうすでに誰かが知っていることとか、すでに分かっていることについては、たしかに知識の量がふえると知らない量は減っていくことになります。ただし、ここで言っている知識というものは、何かの論証のための知識ではなくて、それを探求するような知識です。こういう性格の知識が非常に大事だというわけです。

思考を司る言語教育の重要性

語学の教育については、今、小学校から英語課程をカリキュラムの中に導入するといろいろな試みがなされていますけれども、私の尊敬する英語教育の専門家の方がた、たとえば鳥飼久美子さんとか、東大の行方昭雄さんとか、それから中谷先生もよくご存じの水村美苗さん等は、まず日本語をちゃんとやらないとだめだとおっしゃっています。つまり、小学校で英語を勉強するということは、英語あるいは外国人に対するメンタルブロックを取るというぐらいの意味だったら分かるのです。外国人を見てびっくりするのではなくて、自分と違う言語を話す人間がいる、違う文化を背負っている人がいるということを知るといい意味ではいいのです。けれども、小学校から日本語のちゃんとした教育のカリキュラムの時間を減らしてまでして、英語の教育をするというのは、私はちょっと言葉はきついですけれども、邪道だと思うのです。

小学校から英語教育、という考えはどういうところから出てきているかということ、「言語はコミュニケーションの手段だ」という考え方です。確かに言語はコミュニケーションの手段でもあり、人とやりとりをするときにももちろん使いますし、正確に使えば非常に便利な道具ですけれども、もともと言語というものは考えるためにあるのです。考えるということにも、いろいろな内容とか形態があると思うのですが、そもそも言語がなかったら、何かを考えること自体ができませんよね。

そして、コミュニケーションというよりも、むしろシンキング、考えるための言語教育は、やはり母語という

か自分が生まれたときに獲得した言語で十分な語彙を持ち、その語彙でいろいろなコンセプトを理解し、それを表現していくようなことが非常に大事なのです。

グローバル人材には英語が必要だということをすぐ言う人がいます。それは英語をしゃべれた方が楽しいし、目的がはっきりしたコミュニケーションに関しては抜群に便利ですね。だけれども、そのことのために母語というか、自分の最初に獲得した言語が持っている思考に対しての力を萎えさせるということは、長期的に見れば非常に困った問題だと思います。語学教育は非常に重要だと私は思いますけれども、語学教育に対してのちょっと偏った見方が、今の大学教育の中にもものすごく浸透してしまっているのだと思います。

かつて私の大学時代のドイツ語を、私の父は「何だ、なっていない」と言っただけにしたことがあるのですが、私の娘たちが大学のドイツ語の試験のことを私に聞きに来たのを見たら、私の大学時代よりももっとひどいのですよ。ということは、言語教育の時間数がどんどん減っているのです。第2外国語を必要としないという大学もありますね。では第1外国語をもっと徹底して教育しているかということ、そうでもないのです。

東京大学教養学部の齊藤兆史先生は2冊ほど中公新書を書いておられますが、そのうち『英語達人列伝』において、新渡戸とか、岡倉天心とか、幣原喜重郎とか、そういう人たちがどのようにして英語を自分のものとしたかについて書かれています。この本を読むと、今私が申し上げたことをそのまま証明してくださったように思うのです。

幣原喜重郎は、ワシントン会議、それから戦後のマッカーサーとの憲法の問題や占領政策に対してのやりとりを極めて正確で、かつ相手の敬意を受けるようなすばらしい英語でこなすことができましたが、幣原がそのようなことをできた背景は、彼のもともとの日本語と漢学の素養ですよ。

岡倉天心についてもそうだと思うのです。岡倉天心は子供のときから英語をブロークンであってもしゃべれた

らしいのですが、その英語は全然だめだということをアメリカ人の牧師から言われて、では最初に彼が何をやったかという、漢文の勉強のやり直しでした。

英語をコミュニケーションの手段だとする見地からすると、何か非常に遠回りなことをやっているのです。ただし、何度も申し上げるように母語で自分の考えを正確に伝えることができるようなポスト、職業につく人の英語というものは、そういう素養が求められるということだと思うのです。

大学の語学の先生方は大変な努力をされていると思うのですが、戦後の語学教育は駄目になったと思います。たとえば数学は定理をまず勉強して、そして例題としてその定理を使って何かを証明したり、計算したりするという何を何題も練習しないと身につかないですよ。語学もそうだと思うのです。語学のように、非常に単純な繰り返しをしないとどうしても身につかないものについて、トレーニングといいますが、訓練みたいな要素が戦後の大学の中からどんどん消えていっていると思います。

作文教育においても同様です。日本の学校では「思った通り、思ったことを書きなさい」と言われますよね。しかし、こんな教育している国は他にはないと思います。たとえば、アメリカのライティングの教室にしても、学校で習うにしても、ライティングのためにはスタイルが必要で、そのスタイルにはこういうふうな規則がありますよ、パラグラフはこういうふうに分けなさい、ボキャブラリーは同じものを何度も使うとか、そういう技術的なことをきっちりトレーニングとして教えています。それで初めていい文章が書けるようになるのです。日本の小学校のように、「何を感じたか、思ったことを書きなさい」では訓練ではないのです。

それと同じような意味で、語学の勉強が非常に軽んぜられていると思います。

おわりに：古典を読むことはなぜ必要か

これで最後にしますが、なぜ小説の古典を読ん



でおもしろいと思うか、古典を読むということがなぜ必要なのかということについて、重要なことだけお話ししたいと思います。ちなみに私は漱石も好きですし、谷崎潤一郎も非常におもしろいと思います。そして、それらの本をなぜ若い人に薦めたくなるのか、なぜおもしろいと思うのかということについては、「人間理解を広げ深めるため」と説明しています。

これはフランスのブルーストという作家が使っている例ですけども、文学とは一種のプリズム、すなわち光学器械みたいなもので、「こういう人間像もあり得るのか」ということを、文学というプリズムを置くことで、人が新たに知ることができるようなものだと言っています。

また、ピケティが『21世紀の資本』で引用したことで話題になりましたけれども、バルザックの『ゴリオ爺さん』に登場する人間は、割に身近にいる人間を描いているようですけども、それだけではないのです。そうした登場人物にプリズムを近づけると何かおもしろい要素が出てきて、「ああ、こういう人間もいるのか」ということを読者が知るとい役割があるのです。ですので、こういう機能あるいは作品を知らずして、若い時代を過ごすというのはもったいないと私は感じているわけです。ですから、古典というものをもっと読むべきだと思います。

私は3~4年前から、高校生と一緒に古典等を読んで、それを材料にしていろいろ話し合うという、東京のアспен研究所のプログラムに協力しているのです。最初は、高校生がこんなに難しい古典を読めるのかなと思っていたのですが、高校生の感性は実にすばらしいのです。し

かし、大学に入ってきてしばらくすると、あんなにおもしろかった高校生たちが、なんでこんなに凡庸で普通の人間になってしまうのかなと思います。高校の最後か大学の初めぐらいに、何かよくない精神的ショックがあるのでしょうか。

ここで申し上げたかったことは、そういうヒューマニティーの勉強なり語学の勉強というものは、トレーニングの要素が必要で、無味乾燥な繰り返しをしたり、暗記をしなければならぬけれども、それをある程度乗り越えた後には、何かもっと豊かな世界が広がるのではないかと、ということです。

さて、19世紀以降の科学と技術の進歩によって、われわれの身体機能は大いなる拡大を遂げました。空を飛ぶことができるとか、新幹線で東京と京都の間を2時間ちょっとで移動することができるとか、そういうフィジカルな機能はものすごく発達し、肥大しました。

だけれども、実はこうしたフィジカルな、「合理的なもの」だけではわれわれは満足できないのです。われわれは合理的に物事を説明されることだけでは必ずしも満足しないものです。合理的、理論的、分析的なことを説明されても、あるいは理解しても、むしろそれに対して防御するような本能を持っているのです。そのような、知性の解体作業への防御機能のことを「fabulation機能」と言います。

アメリカにしてもヨーロッパの大学にしても、日本が直面しているものと同じような問題を抱えていると思います。ただし、アメリカの場合ですと、大学が多様な形態でいくつかあります。冒頭に申し上げたようにリベラルアーツだけをやっている大学がある一方で、リサーチ・ユニバシティーの大学院があり、リサーチャーを育てています。基本は、教養教育をベースにして専門に入っていくというものです。

また、アメリカではユダヤ人ないしはユダヤの伝統で教育を受けた科学者や経済学者が学者は非常に多いです。ちなみに私はこの4月に、日本ヘブライ協会の主催している「過越(すぎこし)祭」の食事会に参加しました。

それは、本来は一晩夜明かして食事をいただく儀式のようなのですけれども、今回は4時間の短縮版でした。そして、ユダヤの食事を食べながら、出エジプト記とか旧約聖書を読むのです。もっとも、私はお酒が飲めなくなったので、残念ながらワインは飲めなかったのですけれども。

そして、あのような儀式のやり方は、それ自体は非合理性の典型だと思うのです。そういうことをやり続けてきた文化の中から、極めて合理的で優れた数学者や物理学者が出ているということは極めて興味深いことだと私は思います。こうした非合理性の価値を、文部科学省は考え直してほしいというのが私のきょうの申し上げたかったことであります。

ちょっと時間を取り過ぎましたので、一応ここで質問がございましたらお受けしたいと思います。

質疑応答

【司会】 猪木先生、どうもありがとうございました。

古今東西のいろいろな識者のお話もひも解いていただきながら、「教養」とは何かということを改めて考えるいい機会になったと思っております。会場の皆さんから、きょうのお話の中でここをもう少し聞いてみたいなというところがあれば挙手いただきたいと思えます。

【質問】 先生から直接お話がお聞きできてすごく光栄に思っております。ありがとうございました。実は2つばかり聞きたいことがあったので、初めに手を挙げさせていただきました。

最初の質問は、まず先生の御本の中で、学部生というのはもっと数を少なくして、リベラルアーツを徹底した教育をした方がいいというふうに書かれていらっしゃるわけですが、それは確かにそうかなと思うのですが、その場合、それを教える先生はいるのだろうかと思いました。教養というものは、雑学とは違うものなので、そういうものがベースにあったら確かに人間としてこれから先、心強いだろうと思う反面、そういうことを教える教授が果たして何人ぐらいいるだろうかということを感じました。それがひとつ目の質問です。

もうひとつは、大学の意義についての猪木先生のお話の中で、教育と研究ということがあげられていたと思います。実はこれから学部長になるかならないかというような友だちがいるのですけれども、その人の話を聞いてびっくりしたことがあります。その友だちが学部長という推薦があったときに、「なるかどうか迷っている」という相談を受けました。私はサラリーマンですから、学部長というと出世みたいなイメージがあったので、「何言っているの、いいじゃない、何でそんなに学部長になることを躊躇するのか」という話をしたら、「だって、学部長になったら自分の研究ができなくなるじゃない、あんなの誰もなり手いないからバ

バ引きみたいなのなのよ」というふうに答えたのですね。それで、「あ、教授というのはそういうふうに見えるのか」と思ってびっくりしたのです。

もし大学の先生がそんなことを本当に思っているのなら、大学の経営と研究を分離して、経営がうまい人をもっと積極的に大学に取り込んだ方がいいのではないかと思ったのです。

この2つの質問について、ぜひお教えいただければと思って質問させていただきました。

【猪木氏】 極めて明快なご質問で、私が感じている範囲でお答えします。まず、リベラルアーツを教えることができる人が本当にいるのかどうかというのは、これ確かにものすごい深刻な問題だと思えます。違う言い方をすると、たとえば日本史、世界史を通史として教えることができる先生がいるかどうかということとも関連するのです。

どういうことかと言うと、研究者というものは、ある特定の絞ったテーマに関して、レフリー制のあるジャーナルに論文を書いて評価されないとジョブがないものなのです。そして、その研究者が優秀であればあるほど早く認められたいものだと思えます。だから、優秀な人はもう絞りに絞って、これ以上絞れないようなテーマに関して、レフリー制のあるジャーナルに論文を何編書いたか、という実績をもとにジョブを見つけるのです。これは理系の非常に強い影響だと思えるのですけれども、そういうふうになっているのです。ですから、通史を教えることができる人は本当に少なくなっていますし、リベラルアーツの古典を解説できる人もほとんどいなくなってしまったということで、これはおそらく確かなことだと思えるのです。もちろん、確かに古典を研究している人はいます。ただし、古典というのは、訓詁注釈的に「これはこういう意味ですよ」という形だけで読むものではないと思えるのです。

ところで、それこそ研究バイアスの典型的な例だと思うのですけれども、たとえばダンテの研究者に対して、「あなたは何をされていますか？」と質問したとき



猪木氏

に、「ダンテを研究しています」と言った方が、「ダンテを読んでいます」と言うよりもちょっと格が高い感じがするのです。だけど、イギリス人の学生でも、「あなたの専門は何か？」というときに、「ファット・アー・ユウ・リーディング？」と言いますよね。あなたは何を読んでいるかと。それはやはりイギリスの一種の伝統というか、研究しているなどという卑しい生き方ではないということだと思います。これは冗談になりますけれども。

だから、私は古典というものは、「古典を読む」のではなくて、「古典に何を学ぶのか」ということが重要だと考えています。実際、100%全部の語彙が分かり、その解釈はこれしかないなんていうことが言える人はほとんどいないと思います。一方、古典に多くの智慧が詰まっているものだと考えれば、古典を読んで「私はこういう点がおもしろいと思った」とか、「これはこういう意味じゃないか」ということを自由に議論することが必要だと考えています。語弊があるかもしれませんが、解釈なんて少しぐらい間違ってもいいと思うのです。リベラルアーツを教えるにあたって、哲学史を古代から現代まで全部解説できる人がいなくても、たとえばキケロでもプラトンでもいいですけれども、哲学の議論の対象になる古典的な本を選んで、それを専門家の独占から解放して、自由に読むということをやった方がいいのではないかと思います。その意味で、リベラルアーツの先生がいらないということに

関しては、私はあまり問題視をしていないのです。それが1点です。

それから第2点目の、学部長とかが嫌な仕事になったということは確かだと思います。そして、学長をやりたいと思っている人にはやらせたくないのです。「やりたくない、やりたくない」と言って人には、やってもらいたいというのが、大学の組織です。企業ではそんなことはないと思うのですけれども。大学の組織はみんな、そういうジレンマに悩んでいるのではないのでしょうか。確かにおっしゃるように研究時間が取られるのは嫌なものです。だから、「そういう管理的な業務はあいつにやらせておけば無難だろう。公私混同はせんだろう」という程度の仕事になっているということは実は悲しいことですよ。もうちょっと学生に接して、自分の考えを学生にぶつけられるような人が大学の学長をやるべきだと私は思うのです。

余談になりますが、政治家もそうですよね。自ら政治家になりたいという人には政治家をやらせたくない。けれども、皆さんの中で日本を変えないといかんと、選挙に打って出ようという人はまあいいと思うのです。政治家というものは影響力もあってすごいらなと思うのだけど、やはりやりたくないものなのです。それをいみじくもトクヴィルは、『アメリカのデモクラシー』の中で、早くも1830年代に述べています。今後の政治家は一種の専門になってしまい、みんなやりたがらなくなる職業になるだろうと。それがデモクラシーの一番危ない点だということです。ですから、第2点目はまったく残念ですね。

私も学部長をやったことがありますけれども、きのうまでは大学経営について何も知らない人が突然学部長になって、文部科学省に行って予算のことをいろいろ言われて、また文章を書き直してということをやったわけですね。それを2年、3年やって終わって、平の教授に降格して給料はもとのままになるわけですね。これも普通の企業ではないでしょうね。社長さんを退任した後、普通の一般社員になって、元社長が薄給に悩むと

いうことはないと思うのです。

このように、大学は今までは素人のマネジメントでかろうじて持ちこたえてきたのです。ところがもうそういう時代ではなくなって、財政の問題や人事の問題にしても、むしろ大学の経営を専門の見地から改革していかなければならないのだと思うのです。

しかし、残念ながらアカデミック・アントレプレナーがいないということも、特に日本の場合には大きな問題だと思います。東大の教育学研究科の中で、経営学のような学科ができたそうですが、今までは、教育学において大学経営自体を勉強して、それに携われるような人を育てるといった伝統がなかったのです。大学の管理というものは、基本的に国立大学の場合には文科省が担ってきたのです。国立大学の副学長は、仮に5人副学長がいたら、そのうちのひとつのポストは必ず文科省から来た官僚の受け皿になっています。そういう官僚をいただいおかないと、大学からも必要なものを求めることができない、という都合の悪い関係ができていくわけです。

でも、こういうことを言っていると社会から嫌がられるのです。昔は、「先生、どう思われますか」などと意見拝聴と言ってよく来られたのだけれども、最近はまったくありません(笑)。年のせいもあるのですが、残念なことです。

【司会】 次の方どうぞ。

【質問】 ご講義、どうもありがとうございました。実はちょうどイスラエルの科学技術を調査しに行くことになりました。イスラエルは科学技術のレベルが高く、また、軍需技術の転用もすばらしいのですが、一方で、猪木先生がおっしゃっていらしたように、非合理的な部分も抱えているとのこと。そこで、イスラエルについてももう少し教えていただきたいのですが。

【猪木氏】 日本ヘブライ協会という団体がユダヤ教のリタージ(礼拝)というか儀式を日本で再現するというのを時々やるのです。私が申し上げた「過越祭」というものは、イエスが磔刑にあった日から復活するまでの



1週間がユダヤ教の「過越」の期間なのですが、その最初の夜に儀式的なごちそうを食べて、お祝いをする祭りのことです。新約聖書の中にも「過越」という言葉が出てきます。私が申し上げたのは、その内容自体は少なくともロジカルに科学的な言語で説明できるようなものではないということです。まさにファビレーションといいますが、合理的なものに対する一種の防御、抵抗のために人間が考え出したものなのだろうと思います。それは、決して宗教がうそだという意味で言っているのではなくて、本質的な人間のリアクションがそういう形で出てきたのではないかと思います。

一方で、ユダヤ人には、ものすごい数の理数系の学者がいますよね。私がアメリカに行っていたとき、同じリサーチアシスタントをやっていた同僚で、頭に例の帽子を被ったユダヤ教の学生がいました。彼は、毎日ある時間になると、小さな本を出してきて、窓のそばに行って何かつぶやいているのです。「ああ、これが祈りの時間だろうな」と私は思い、詳しくは聞かなかったのですが。彼は数学が専門だったのですけれども、そういう論理的なものを研究していながら、一方で宗教という非合理的なことが相補い、両立していることに関して私は非常に不思議な感覚を覚えました。そして、単にお金を注ぎ込んで工学部をつくり、あるいは科学技術の研究費をどんどん投入すれば技術革新が起こって、そして経済が発展するなんて、そんな単純なことを考えていない人たちののだなと思ったのです。

ユダヤ系ロシア人でペレルマンという数学者がいま

す。彼は、フィールズ賞を拒否したことで有名で、この人のドキュメンタリー映画を私は見たことがあるのですが、あの人も非常に不思議な人ですよね。最後は一種の脱魂状態みたいになって、高校時代の恩師が訪ねて行っても、アパートの中に閉じこもって出てこないのです。だからメンタルな問題を抱えていたと言えるかもしれませんけれども、彼の中にも非合理的なものに対してのもので強い関心と、同時に合理的なものを求め続ける知識欲みたいなものが両立していたのです。

われわれは一般的に、知識を追い求めることにあまりにも熱中し過ぎてしまい、その結果から何かいいものが出てくるのではないかと思ってしまうものです。けれども、ユダヤ人の非合理的なものに対する粘り強い関心については、われわれが想像できないような、民族的伝統があるのではないかということ深く強く感じます。この問題は、私にとっても謎なので、それ以上うまく説明できないのです。

ただ、中世のキリスト教から科学が出てきたことも確かですし、錬金術があって初めて元素という概念が出てきたとか、それから永久機関というものが無理だということが分かって熱力学が生まれるわけでしょう。だから、非合理的なものを求めるということと合理的なものが誕生するということは、背反的なものではないと思うのです。何かを求めているときに、セレンディピティのように、何か偶然見つかるということもあるでしょうし。やはり、ユダヤ人はすごいなあと思います。

【司会】 猪木先生、どうもありがとうございました。ほかにご質問がありますでしょうか。

【質問】 ご講演、ありがとうございました。質問は、「科学技術」というときに、科学と技術を区別するという考え方もあると思うのですが、それについて猪木先生はどのように考えていらっしゃるのでしょうかということです。

と申しますのは、日本では「科学技術」とひとつの単

語となっており、文部科学省もそうですし、われわれも日ごろそういうふうに使っているのですが、先生もご承知の通り欧米では科学、サイエンスの方を非常に尊敬していて、サイエンティストは尊敬されるのですが、技術の方のテクノロジー、エンジニアの方はひとつ下のランクだというふうに見られていると思います。他方、日本ではエンジニアは非常に尊敬されている職業で、工学部は理学部よりも下とは見られてはいないと思うのです。日本では「科学技術」というものが一体的にとらえられているところがあると思うのです。

また、教養教育については非常に重要だと思っているのですけれども、われわれ企業の側も教養教育に対して責任があるのではないかと思います。と言いますのは、企業は教養課程を出た人をあまり評価しないという傾向があると思うのです。「あなたは何か専門ですか」と聞いて、教養教育の人に対しては就職がしにくいというところがどうしてもあるかと思います。一部の大学では、たとえば国際基督教大学とか、秋田の国際教養大学とか、早稲田も国際教養学部をつくって頑張っているのですけれども、一般的な傾向としては学生が就職しにくいと思います。また先生についても、教養学部の先生は専門学部の先生より低く見られているところもあると思います。他方、教員のコストを考えると、多様な学門分野の先生を揃えなければいけないということで、教養教育をやろうと思うと大学にとって非常にコストがかかるということで、よほど気合いを入れないと苦しいのではないのでしょうか。

【猪木氏】 どうもありがとうございました。最初のご質問ですが、まさにおっしゃるように「科学技術」というときと、「科学・技術」という使い方がありますね。端的に言うと、「科学」というものはキュリオシティというか好奇心に結びついており、「技術」というものは利益と結びついている、という違いがあるのだと思います。また、科学で発見されたことが技術に結びつくというためには、歴史的に1000年ぐらい差がある場合もありますし、技術は基本的に後ですよね。たとえば蒸気

の原理については、蒸気を使ったおもちゃでローマの貴族が遊ぶとかいうかたちで、もうAD 1世紀ぐらいに発見されているのですけれども、蒸気機関が生まれるのは18世紀の初めぐらいのことです。社会的に技術が生まれるということと、サイエンティフィックなディスカバリー、すなわち発見というものはまったく別だと考えた方がいいと思うのです。こういう事例は、技術史の研究でいっぱい挙げられていますので、私が今また改めて申し上げることではないと思います。

また、福沢諭吉の時代、西洋の学問一般、特にサイエンスをさす言葉として「窮理学」という言葉が造られました。これは現代では、物理と訳してもいいし、哲学と訳してもいいと思います。つまり、もちろん形而上と形而下という違いはありますけれども、古代ギリシャでは哲学と物理学とは、好奇心をもとにして何かを解こうとする精神という意味で非常に重なっていたものなのです。

何を申し上げようとしているかということ、科学はもともと実用性そのものを目指しているわけではない、ということです。たとえばエジソンがレコードを発明した理由は、ベートーベンのシンフォニーを聴きたいからではなくて、また、いろいろな食品を缶詰にしたからでもなくて、ただ純粋に音を再生できる装置を考えていたというキュリオシティですよ。それが結果として、産業としてもものすごい形で発展したのです。ただし、「科学」と「技術」の2つは厳密に区別すべきで、そういう意味では、「科学技術」という呼び方で一言で言うてしまうことは、概念上のものすごい混同を生んでいると私も思います。

それから第2点については、最近この10年、私はイギリスに行ったことがないのであまりフレッシュな情報ではないのですけれども、特にオックスフォード、ケンブリッジ等のイギリスのちゃんとした大学の学生で、自分の専門を威張って答えるのは、クラシックスとかヒストリーです。一方、「経済学」はちょっと恥ずかしげに言います。ヒストリー、クラシックスを勉強

した人が将来何やっているかということ、実は株式のブローカーになったり、証券取引所で働くとか、非常にプラクティカルで実利的な分野で活躍する人が多いのです。

一方、日本では先ほどおっしゃったように、どこの大学やどこの学部がどうだとか、われわれはだいたい序列をつけるのが大好きなのです。これは日本の大きな弊害だと思うのです。ですけど、そういう序列化をしないで、古典と歴史を勉強しているということが、どの分野に行くにも一番優秀なのだと思なされれば、かなりフレキシビリティの大きい人間になるのではないのでしょうか。

日本の場合に、経済学部の学生は、たとえば証券会社に行くとか銀行に行くという選択はありますけれども、文学部の学生はあまりこういう分野には就職しないですよ。そういう意味で学問の分割ということと、その人の潜在的意味を持っている力みたいなもの、いわゆるOFF-JTとOJTの役割みたいなものについての理解がもうちょっとあってもいいのではないかと思います。

それから、大学の序列化についても困ったものですね。これは天野さんという教育学の専門の立派な先生がこの間書いておられたことですが、明治以降現代まで、文科省は競争的資金とかいろいろな学校の競争という話をしているけど、私学も含めて慶応、早稲田がやはり私学の雄でしょう。それは明治から100年ぐらいたってもその序列構造というのはまったく変わっていないが、これはいったいどういうことなのだというふうに言っておられるのです。「この大学出た人は立派だ」とか言いますが、現実はその大学の名前を取ってみると、その人は何もなくなっちゃうような人もいますよね。これは悪い冗談ですけども。

あまりそういう言葉は使いたくないですけども、これは要するに権威主義じゃないですか。もちろん、どこの社会でも権威主義的な考え方はありますし、そういう権威主義的に物事を考えるグループはいます。

しかし、一時のアメリカはそうだったと思うのですが、活力のある社会というものは、必ずしも権威主義ではないのです。たとえば、アメリカでは「やれ、プリンストンを出ているから超秀才」だとは必ずしも思わないわけです。どうしてかというと、アイビーリーグ等で特に顕著ですが、アメリカはレガシーという卒業生枠の制度があるからです。ちなみに、同じ制度をステートユニバースティのUCバークレー校等でもやり出していますが、税金で支えられている大学でそのような制度はやるなと言われて、えらいすったもんだした時期があったそうです。たとえば、ハーバードのアンダーグラジュエイトに入ってくる子弟は、そのうち2割か3割ぐらいはレガシーと呼ばれる卒業生OB、OGの子息を優先的に枠で入ってくるのです。しかし、卒業生の子供であれば誰でも入れるということではなくて、ある程度以上という水準はもちろんあるのですけれども。そういう意味でもアメリカ社会は多様なのですよ。ハーバードの学生といっても、スポーツで非常に秀でた者もいるし、いろいろな力を持った人が入ってくるわけです。

ところが、その点で日本は弱いですね。同じ試験の結果、点数が良かった秀才を集めて、学園生活ではだいたい似たような人同士が出会っているわけです。また、大学に行くためには中学、高校から親がかなり投資しないと行けないので、家庭環境も経済的にも互いに似ていますよね。だから、社会的背景の割に似た人が来ていて、われわれが世の中を見る目も、何か自分の知っている世界が全世界だと思っちゃう傾向がありますけれども、たくましさに欠けるのではないかと思います。

【司会】 最後におひとりだけ、どうしても聞かないと帰れないという方がいればどうぞ。

【質問】 きょうは本当にありがたい話で、ありがとうございました。教養のことはすごく大事だと思っております。

福沢諭吉のマトリックスにすごく感動したのですけ



猪木氏

れども、この「聡明の大智」というのが大事だということで、いわば左側の「工夫の小智」が、教養というものを身につけることによって、右側の方に行くということで私は理解しました。

この教養というものは昔から必要だったと思うのですが、経済的に豊かではなかった時代には、経済成長や技術革新が必要で、それこそ「私智」というのが大事であり、それが経済成長に結びついて豊かさになったのではないかと思います。

逆に言うと、現在は経済成長をしなくてもいいよね、という風潮もあらわれたりする中で、そういう時代だからこそ昔以上に「私智」から「公智」に行くということがかつて以上にすごく大事になったのかなと考えたのですが、そういった理解でよろしいでしょうか。

【猪木氏】 半分はそうだと思いますけれども、どうかと思う点は、たとえば経済的な豊かさとの左から右への移行の関係についてです。

たとえば明治時代の政治家で伊藤博文という人物がいますよね。ああいう人たちの漢詩をつくる能力はものすごく高かったのです。中国人が評価して、この漢詩はうまいという日本人は少ないらしく、ちなみに夏目漱石の漢詩はうまいと評価されているらしいのですけれども。それで、伊藤博文が身につけた漢学の素養は、首相になってから習字の練習をしたとか、詩の先生について勉強したというのではなくて、山口県萩にいたときからそういう勉強をしているわけです。そ

れで、当時は豊かな時代であったかという、決してそうではなくて。まさにこれから日本をどうしようという時代ですよね。ですから、長い歴史を通して見た場合には、必ずしも経済的なファクターが重要な役割を果たしてしない時期もあるのではないかと思います。

【中谷理事長】 猪木さん、ありがとうございました。本日はリベラルアーツが重要だというお話でしたが、この会社でもまさにリベラルアーツを勉強しようということで、4～5年前から塾をつくりまして、勉強をしてきました。もっともどの程度それで効果があったかどうかということはいまひとつよく分からないのですが、でも、おっしゃったことはまさにわれわれが目指していたことそのものです。その意味でリベラルアーツ、人文学に対する人々の潜在的な需要というのが今の時代になってだんだん出てきたのではないかと思います。

私が社外でやっている「不識塾」という塾も同様です。この「不識」というのは非合理というか、わけの分からないことをもうちょっと謙虚に見詰めようよという意味なのです。そして、そういうことに対して、企業の中でも、「そういうものを勉強しないとだめだ」という流れにだんだんなってきたかなと感じています。それは希望を持てる点ではないかとお話を伺いながら考えていました。そういうことで、猪木先生のきょうのお話、共感を持って聞いてくださった方がたぶん多かったのではないかと思います。

きょうは本当にありがとうございました。(拍手)

(文責：太下義之・本誌編集長)

開催日：2015年6月3日(水)